

1 むらづくりの主体

- (1) 名称 かきのさわく
柿野沢区
- (2) 所在地 ながのけんいだししもひさかたかきのさわ
長野県飯田市下久堅柿野沢
- (3) 地区の規模 集落
- (4) 組織の性格 地縁的な集団等
- (5) 代表者の氏名、役職及び住所

氏名 みついし ときお
三石 時男

役職 区長

住所 ながのけんいだししもひさかたかきのさわ
長野県飯田市下久堅柿野沢 3 5 1 7 - 7

2 地区の概要

総人口	農(林、漁)業 就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地	採草放牧地	山林
277人	54人	72戸	201ha	32ha	1ha	93ha
農家戸数	専業農家	第 種兼業農家	第 種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
63戸	4戸 (6.3%)	18戸 (28.6%)	41戸 (65.1%)	4戸 (6.3%)	0戸 (0.0%)	59戸 (93.7%)
地域指定状況			農業地域類型区分			
・ 農業振興地域(昭和46年) ・ 特定農山村地域(平成5年)			市町村		当該地区	
			都市的地域		平地農業地域	

3 むらづくりの背景・動機

柿野沢には、明治、大正にわたる60年の間、集落に2カ所の神社があり、北部、南部の和が取りにくいところであった。そこで、昭和初期に集落の和を目指し、区をあげて手作りの公会堂建設が始められ、区が1つになっての地域づくりの先駆けとなった。この動きは昭和21年からの「柿野沢の道づくり運動」、昭和56年からの畜産基地建設(30haの大規模造成)に継承される。

一方、柿野沢区のある下久堅地区は、もともと傾斜地が多い中山間地であり、段丘崖の急傾斜地は段々畑として利用していた。農業経営の柱は米・酪農・養蚕であったが、昭和50年代後半からの養蚕価格の低迷をはじめ産業構造の急激な変化により、兼業化・離農する者が続出し、高齢化や後継者不足といった問題が深刻化していった。

そこで、昭和57年に区が実施したアンケート調査をもとに、「地域の自立」、「柿野沢の集落力の増強」を目指すべく、正副区長と区の代表者の14名が中心となって、酪農を中心とした専業農家群、土日農業を基盤とする兼業農家群の育成をめざす「柿野沢基本構想」を策定する。また、集落複合経営の実践として昭和60年より「柿野沢基本構想」の実現と、畜産基地建設の際未整備であった集落内の洞(谷地田)の整備のため、柿野沢区が主体となって、新農業構造改善事業で土地基盤整備や構造改善センター建設を行うなどハード面の整備を実施した。ソフト面でも、既に農産物直売を通じて愛知県足助町と交流していたこと^{あすげちょう}で、折しも市が推進していた「ムトス飯田まちづくり事業」(注1)に取り組み、現在まで続く地域マネジメント(集落複合経営)活動(注2)を開始し、その後の都市農村交流の拡大のきっかけとなった。

(注1)「ムトス飯田まちづくり事業」

昭和57年、飯田市は「10万都市構想 田園都市をめざして」を打ち出した。「ムトス飯田」とも呼ばれ、自然と歴史の継承 知力・活力・魅力 調和と連帯 文化と安らぎの創造の4つの柱からなる。「ムトス」とは「・・・せんとす」すなわち住民ひとりひとりの自発的意志を意味する。ムトスを各集落、各地区での合意へと積み上げていくことによって市全体のプランの実現をめざすものである。

(注2)農業地域マネジメント(集落複合経営)

「専業農家、兼業農家、サラリーマン、自営業者、主婦、学生など様々な立場の人が、自ら生きるべき道を定め、行政に依存することなく、自立的に地域経営にあたらうとする地域づくり・人づくり戦略」。飯田市が平成元年に開始した事業である。

4 むらづくりの内容及び成果等

(1)養蚕価格の低迷をきっかけとする「梅」「柿」の拡大

昭和50年代後半から深刻化してきた養蚕価格の低迷は、養蚕を主体の1つとする柿野沢区に、地域農業の見直しを迫ることになる。

そこで、やせた農地でも利用しやすく、兼業農家でも収穫のあげられる「梅」「柿」「ブルーベリー」を桑畑に改植することで、農地の遊休化に歯止めをかけると同時に、農作業の軽減化と収益の向上を図っている。さらに、地区の老人クラブによる「菊」づくりも加わり、年間を通じた遊休農地の解消活動が展開されている。

【 成果等 】

梅・柿などへの改植による遊休農地の解消：11ha

(2)お年寄り、女性の能力を最大限に活用した「母さんの手づくり味噌」「久堅御膳」

新たな作目の検討から始まった活動が、高齢者・女性の能力を最大限に活かした農産物直売や加工の取組につながり、現在は「柿野沢生産者組合」(昭和61年設立：72戸)が主体となり、柿野沢区民センターに併設の加工所を利用して「母さんの手づくり味噌」、梅を始めとする加工品や、地域農産物を素材とした郷土色豊かな「久堅御膳」の提供を行っており、都会から来た人たちを、心のこもった食材でもてなしている。



加工所でのみそづくり



加工所で働く女性たち



久堅御膳

【 成果等 】

長野県主催の「あじの文化展」コンクールにおいて、ふるさと賞を受賞。
(平成6年)

柿野沢区民センターには、年間を通じ、北は青森から南は鹿児島まで、約1,400人が視察などに訪れるが、「久堅御膳」は大好評。

(3) 中山間地域直接支払制度の活用と農作業受委託組織の発足

担い手の減少や、農業従事者の高齢化などの問題がいずれ出てくることを見越して、農作業の受委託を中心とした集落営農の推進を図るため、平成12年から始まった中山間地域直接支払制度を活用し、平成15年に「柿野沢農作業受委託組合」(組合員68名)を発足。平成15年の春から共同育苗、田植えの作業受託を開始している。

【 成果等 】

農作業受託(平成16年)

- ・共同育苗：1,000箱
- ・田植え等：約4ha(区全体の水田の約半分)

(4) 伝統の継承「紙すき」の復活

柿野沢区の伝統として受け継がれてきたものに「紙すき」がある。生活スタイルが変化するにつれ徐々に衰退していったが、昭和62年に、使われなくなった紙すき工具が小学校へ寄贈されたことがきっかけで、授業の一環として「紙すき」が行われるようになる。

今では、小学校教室に立派な「紙すき工房」が整備され、子どもたちに集落の伝統技術を伝えるとともに、こうぞ、ケナフ等の栽培を通して、紙すきの技術を教えるお年寄りとの交流が生まれ、彼らの新たな生き甲斐にもなっている。

【 成果等 】

こうぞ、ケナフ栽培による遊休農地の解消：3a

和紙づくりを通じた各産地との交流も盛んであり、平成18年には「和紙加工全国大会(仮称)」が、柿野沢で開催される予定となっている。

(5) 農業体験等の受け入れを通じた都市農村交流

「柿野沢生産者組合」が中心となって、愛知県足助町^{あすけちょう}や東京都世田谷区、渋谷区でのイベントに参加し、五平餅や梅漬け、手作り味噌など柿野沢の特産物を販売している。

また、中学生などの体験教育旅行を平成8年から受け入れており、田植えや草刈り^{なかはた}などの農業体験、五平餅づくりなどの食体験を行っている。平成12年からは、渋谷区中幡小学校と「どんぐりの森小学校」による交流を行っている。これは、子供たちがどんぐりから発芽させた苗を、柿野沢区の里山に植え、その子供が大人になった時、自分の子供を連れてこの地を訪れるといった次世代へつなげる取組である。



世田谷区民まつりへの出店



どんぐりの森小学校

【 成果等 】

各種イベントに定期的に参加。

- ・愛知県足助町^{あすけちょう}
- ・東京都世田谷区・渋谷区「区民まつり」

体験教育旅行の受け入れ：22校約800人（平成15年）

【むらづくり推進体制】

下久堅自治協議会

柿野沢区

区長 (区のリーダー)
副区長

区会(14名): むらづくりの最高意思決定執行機関
11組合

道路委員会(6名)

公民館: 地域行事の企画運営
文化委員会(12名)
体育委員会(12名)
各種団体
(老人クラブ、消防団等)

集落振興会議(14名): 農地保全・集落振興
柿野沢営農組合(46戸): 水稲耕作調整
柿野沢生産者組合(72戸): 農産物直売・加工・交流
中山間直接支払7団地(58名): 共同作業・農地保全
柿野沢農作業受委託組合(46戸): 作業受託
各種グループ
(こぶし会、生活改善グループ、若妻会)

中山間地域総合整備推進委員会
: 柿野沢の総合的な整備推進
景観保全委員会(10名)
特産物加工・活用委員会(10名)
農村・公園委員会(10名)
農業体験交流委員会(10名)

都市農村交流

交流・体験・直売

体験教育旅行
ワーキングホリデー
どんぐりの森小学校
足助町
世田谷区
渋谷区

協力・支援



下伊那地方事務所

飯田市

下伊那農業改良普及センター

飯田市農業振興センター

(株)南信州観光公社

みなみ信州農協